

薩摩藩の「奄美差別」テーマに

歴史研究家の箕輪さん講演

武蔵野奄美フォーラム

奄美にゆかりがあり、各界で活躍する人から話を聞いて地域づくりなどを考える「武蔵野奄美フォーラム」（田畑千秋会長）の第44回が2日、東京都武蔵野市の武蔵野商工会議所で開かれた。奄美市名瀬出身で、薩摩藩による奄美差別を研究テーマとしている歴史研究家の箕輪優さん（73）が「奄美差別について」をテーマに講演し、会員ら90人が聴講した。

箕輪さんは東京消防庁を定年退職後、成城大学大学院文学研究科常民文化専攻博士前期、後期課程を修了。奄美近代史の研究が専門で著書に「近世・奄美流人の研究」（南方新社）などがある。

講演のサブタイトルは「薩摩藩（鹿児島県）による奄美差別を検証し、その実相を追体験する」。近世期（藩政時代）、近代初期（県政時代）の島民への圧政について解説した。

「奄美差別について」をテーマに講演した箕輪優さん（右） 2日、東京都武蔵野市

薩摩藩が奄美・琉球へ侵攻した理由について、箕輪さんは「薩摩藩は関ヶ原の戦いで西軍（豊臣方）に加わって負け、財政難に陥ったことから、琉球国が行っている中国との密貿易の利権を奪取すること、奄美諸島を植民地化することが目的だった」と指摘。侵攻後、奄美は琉球から割譲され薩摩藩の直轄地となり、そのことが「奄美差別」の先駆けとなったと説明した。

その後については、服装の制限やノロ・ユタへの弾圧などの差別政策が取られ、さらに明治時代の県政移行後も黒糖の自由売買規制や県本土と切り離れた奄美の独立経済（独立採算制）という経済差別があったとした。

箕輪さんは、奄美差別の歴史を現代に語ることの意味について、「忘れてはいけないこととして警鐘を鳴らすべきで、奄美出身者としてアイデンティティー向上のために歴史を知る場が必要だ」と訴えた。